



かわもと あいいちろう
川本 愛一郎 さん

1958年 月浦生まれ

父は水俣病患者連盟委員長だった川本輝夫（故人）

2004年 作業療法士・言語聴覚士として介護施設を設立

2008年 水俣病資料館「語り部」になる

現在、水俣市出月在住。水俣病被害者手帳保持。

私は、「水俣病」という言葉を使わないようにしています。「水俣病事件」という言葉を使います。

この水俣で「水俣病という病気が起きた」のではない。「傷害殺人事件が起きたのだ」ということを話しています。

当時、不知火海はとても豊かな海でした。漁師さんたちは恵まれた環境の中で、穏やかで豊かな暮らしを営んでいました。ある日、一本釣りの漁師をしていた祖父が、水俣病の症状を発症しました。足の痺れがひどいと言って、足首に輪ゴムを巻いていました。足が紫色になっていたのを今でも覚えています。1965年、その祖父が劇症型の症状で亡くなりました。父は祖父が水俣病で亡くなったと考え、認定をしてほしいと医者に相談をしましたが、「お金が欲しいのか」と言われ突き放されてしまいました。父は、その後熊本県の南部人権擁護委員23名に手紙を書きましたが、誰一人返事をくれませんでした。水俣市の人権擁護委員3名には直接会いに行きましたが、「そんなにお金が必要なのか」と言われ、まともに相手してもらえませんでした。祖父は今も水俣病未認定患者のままです。父は准看護師の仕事をしながらか、祖父と同じように苦しい思いをしている人がいるはずだと考え、毎晩夜中まで、自転車で袋地区や遠くは阿久根まで、話を聴きに一軒一軒回りました。

父は1971年に水俣病に認定され、チッソ工場前に補償を求めて座り込みを始め、その後、東京のチッソ本社前で1年9か月、座り込みをしました。そのニュースが流れると、水俣にいる私たち家族に嫌がらせがきました。父は4回逮捕され、自宅は家宅捜索を2回受けました。しかし、父は無罪となりました。母は私と妹に「父ちゃんはえらか。人のために闘っている」と励まし、乗り越える力をくれました。私は、周りは敵だらけだと思っていました。なぜ被害者がこんな目に合わなければいけないのか。ずっとそう思っていたのですが、東京へ父の応援に行ったらたくさんの方が父たちのことを支えてくれていました。これには本当に感動し、感謝の思いでいっぱいです。

私の現在の仕事はリハビリテーションです。リハビリテーションの理念は、人間らしさの回復と言われています。父川本輝夫がしたことも、同じことだと私は思っています。